

福沢諭吉の四字漢語について

酒井純子

第一節 明治初期における四字漢語の使用

今からおよそ百二十年前の日本は、長く続いた江戸幕府による封建制度が崩壊し、文明開化の波が一気に押し寄せ、西洋の文化が大量に流れ込み、世の中が大きく変わりつつある時期であった。

こうした文明開化は、言葉の上にも変化をもたらした。その一つに漢語の大流行がある。

明治初期における漢語の流行の実状は、例えば、「都鄙新聞」(明治元年五月創刊)の次の記事によっても察知される。

此頃鴨東ノ芸妓、少女ニ至ルマデ、専ラ漢語ヲツカフヲ好ミ、霖雨ニ盆地ノ金魚ガ脱走シ、火鉢ガ因循シテキルナド、何ノワキマヘモナクイヒ合フトナレリ。又ハ客ニ逢フテ此間ノ金策ノ事件ニ付建白ノ御返答ナキハ如何カ、ナド実ニ聞ニ堪ヘザル。また、石井研堂氏が、

明治維新後、日常の会話に、漢語を使ふことの流行を見しは、奇なる現象なり。思ふに、これ維新の風雲に際会して俄に擡頭せる官吏は、多く月落ち烏

啼いて的書生畑より出でし人々であり、その人々の使用語が、優越語標準と認められ、それを真似るのが天下一般の維新色を發揮せしに非ざるか：漢語の流行は、一年ましに盛んになり：

(「明治事物起源」 昭和十九年刊)

と述べておられるほか、宮武外骨氏は、

明治の初期は四字漢語の時代であった、官衙の布告布達でも、民間の新聞雑誌でも好んで四字漢語を用いた、法律の語などにも、それが多かった、と雨花先生のおはなしを承り、それを調べて見て成程と頷いた

尊王攘夷 開港佐幕 公武合体 大義名分 王政復古
大政奉還 明治一新 廢藩置縣 文明開化 自由平等
民選議院 君民同治 信教自由 神仏混淆 舊弊頑固
因循姑息 肉食妻帯 利用厚生 權利義務 公明正大
人才登用 不羈獨立 新政厚徳 民権自由 三権分立
朝令暮改

など一々挙げればマダ沢山ある、又法律語も舊刑法には四字漢語が多かった

有心故造(故意) 期滿免除(時効) 數罪俱發(

併合罪) 再犯加重(累犯) 毆打創傷(傷害)

家資分散(破産)

これも算へ立てればマダ十数語ある

と、数多くの四字漢語を列挙して、明治初期を「四字漢語の時代」と指摘しておられる。

このように、学者だけでなく、芸妓や舞子までが使用するほど、当時は漢語が流行していたという。しかしながら、一般の人々の間に理解の実が伴っていたかという点はかなり疑問である。

一方、当時、識者たちの間には、漢字の弊害をめぐって種々の議論がされていた。例えば、前島密は、慶応二年十二月に、「漢字御廃止之儀」を將軍徳川慶喜に建議して、漢字全廃論を唱え、西周は、「明六雜誌」第一号(明治七年)に、「洋字ヲ以テ国語ヲ書スルノ論」を發表し、ローマ字採用の十利と三害を論じている。

また、福沢諭吉は、

一 日本に仮名の文字ありながら漢字を交へ用るは甚だ不都合なれども、; 今俄にこれを廃せんとするも亦不都合なり。

一時節を待つとて唯手を空ふして待つ可きにも非ざれば、今より次第に漢字を廃するの用意専一なる可し。其用意とは文章を書くに、むづかしき漢字をば成る丈け用ひざるやう心掛ることなり。むづかしき字をさへ用ひざれば、漢字の数

は二千か三千にて沢山なる可し。

(「文字之教」端書 明治六年)

と述べ、漢字を廃止していく準備として、難しい漢字なるべく使わないことを提案し、難しい字を使わなければ、漢字の数は二千か三千で沢山だと、漢字の節限論を唱えている。

本稿では、右に記したように、漢語が氾濫し、四字漢語が流行した明治初期において、漢字節限論を唱える福沢諭吉が、どのような四字漢語をどのように使用していたのか、その特徴を考察したいと思う。

第二節 福沢諭吉の四字漢語使用

(一) 四字漢語使用の実態

次の表は、福沢と当時の代表的啓蒙家たちとの四字漢語使用の状況を示すものである。なお、表中の「一頁」とは、D~Jの底本「明治啓蒙思想集」(「明治文学全集」第八巻筑摩書房)による。A~C(底本「福沢諭吉全集」第一巻第二巻岩波書店)、K(底本岩波文庫第一巻)も、それに従い換算して示した。

調査資料

A	福沢諭吉	西洋事情初編	慶応2
B	同	学問のすすめ	明治5~9
C	同	文明論之概略	明治8

一頁当りの異なり語数では、十一作品中、Aが十位、Bが七位、Cが三位と、Cを除けば福沢の作品は、他氏と比べてそれほど多くないが、一頁当りの延べ語数を見ると、Aが八位、Bが四位、Cが二位と、いずれも順位が上がっており、使用量（延べ）の多さを示している。

③は②を①で割ったもので、一頁における異なり語一語の一頁当りの平均使用度数を示すものであるが、これでも、Hが三・一〇と圧倒的に多いのを除けば、福沢の三作品が、他氏の数字をかなり上回っていることがわかる。つまり、福沢は四字漢語の種類をある程度限定

D	西 周	「百一新論」	明治7
E	津田真道	「明六雜誌」	所収論文 明治
		7	8
F	杉享二	「明六雜誌」	所収論文 明治
		7	8
G	森有禮	「航魯紀行」	慶応2
H	加藤弘之	「国體新論」	明治7
I	箕作麟祥	「明六雜誌」	所収論文
		「国政轉變ノ論」	明治7
J	中村正直	「明六雜誌」	所収論文 明治
		7	8
K	久米邦武	「米歐回覽実記」	第三、四卷 明治11

	①一頁当りの異なり語数	②一頁当りの延べ語数	③一頁当りの異なり語一語の平均使用度数
A	4.7	6.9	1.47
B	7.2	11.1	1.54
C	8.6	14.0	1.63
D	5.8	6.4	1.10
E	11.4	13.3	1.17
F	8.1	8.9	1.10
G	3.6	3.9	1.08
H	10.4	32.2	3.10
I	6.0	6.6	1.10
J	7.6	8.3	1.09
K	7.7	8.0	1.04

して、それらを回数を重ねて使用していたということが言える。

また、他氏の四字漢語の中には、「檢知明覈」(E)「雑居顯幽」(E)「麒麟鳳凰」(D)「製礪製鐵」(G)など、難解なものが数多く見うけられるのに対し、福沢の四字漢語は、「一身一家」「公明正大」「大同小異」など、平易な漢字でできているものが多く、読んですぐに意味がわかるものがほとんどである。

つまり、福沢は、明治初期の三作品において、平易な漢字を用い、漢字の数をある程度限定した上で多くの四字漢語を用いており、自ら漢字節減論を実践しているとも言えよう。

(二) 福沢諭吉の四字漢語の特徴

福沢の使用した四字漢語には、どのような特徴があるのか見ていきたい。

(1) 構成パターン

まず、一字一字の漢字が、どのように結び付いて四字漢語を構成しているかを、野村雅昭氏が「四字漢語の構造」(国立国語研究所報告58『電子計算機による国語研究VII』昭和五十年刊所収)の中で行っている分類方法へ注Vに基いて調査したものが、次の下段の表である。

この表で見ると、福沢の使用した四字漢語は、I型(○+○)+(○+○)、つまり、二字十二字で構成されたものが、異なりで一三九五語と、全体の九八・二%をも占めているが、他の啓蒙家においては、異なりで九九・〇%、延べで九九・一%と、福沢よりもさらにI型の占める割合が大きくなっている。

福沢の非I型は二%に満たないが、その類別と例語は次の通りである()内は使用度数を示す。

① (○+○)+(○+○)+○型 十七例

- 開化者流(1) 改革者流(3) 漢学者流(3)
- 漢儒者流(1) 皇学者流(4) 古学者流(4)
- 国学者流(2) 神仏者流(1) 西洋家流(1)
- 被治者流(3) 洋学者流(6) 合衆国中(2)

		福沢諭吉		他の啓蒙家		久米邦武	
		異なり語数	延べ語数	異なり語数	延べ語数	異なり語数	延べ語数
I型	(○+○)+(○+○)	1395 98.24%	2174 96.15%	482 99.0%	758 99.1%	89 96.7%	92 96.8%
非I型	① ((○+○)+(○+○)+○	17 1.20	67 2.96	1 0.2	1 0.1		
	(○+(○+○))+○						
	② ○+{(○+○)+○}			1 0.2	2 0.3		
	○+{(○+○)+○}						
	③ (○・○)+(○+○)	2 0.14	2 0.09				
	{(○・○)+○)+○			1 0.2	1 0.1		
	(○+○)+(○・○)						
④ (○+○+○+○)	6 0.42	18 0.80	2 0.4	3 0.4	3 3.3	3 3.2	
計		1420 100.0%	2264 100.0%	487 100.0%	765 100.0%	92 100.0%	95 100.0%

合衆国内(2) 人力車中(1) 日本国中(2?)

③ 日本国人(2) 日本国内(4)

③ (○・○)+(○+○)型 二例

英仏商社(1) 新旧約書(1)

④ (○+○+○+○)型 六例

- 加減乗除(5) 喜怒哀楽(2) 金銀銅鉄(2)
- 山沢河海(1) 士農工商(6) 耳目鼻口(3)

右以外の型には該当例が見られなかった。①(○+○)

＋○)＋○型の中には、「開化者流」「改革者流」等の「く者流」という表現が数多くみられるが、これは、福沢の「レットテル」を貼ってわかり易くしようとする意図を示すものであろう。

このように、福沢の用いた四字漢語は、その九八%以上が、I型(○＋○)＋(○＋○)である。それでは、そのI型の四字漢語にはどのような特徴があるのであろうか。

(2) I型(○＋○)＋(○＋○)の特徴
(ア) 前後入れ替え

まず目につくものは、安全幸福・幸福安全のように、前後の二字漢語を入れ替えて使用しているものである。この使用量は、次の通りである(○)内は%を示す)。

	異	延
A	9 (4.2)	12 (3.9)
B	25 (6.5)	61 (10.2)
C	37 (4.4)	77 (5.6)
A C	52 (3.6)	150 (6.6)
D J	20 (4.1)	38 (5.0)
K		

これによると、他の啓蒙家と大差ないが、異なり語数、延べ語数ともやや福沢の方が多い。又、福沢の作品の中

では、異なり語数、延べ語数ともB「学問のすゝめ」に多く見られる。

これらは、すべて二字漢語同士の並列によって出来ているもので、前後を入れ替えてもほとんど意味が変わらないものである。その中には、作品によって使い分けられているものが次の六例見られる。

- 安全幸福 (A1) | 幸福安全 (C1)
- 工夫発明 (B1) | 発明工夫 (C1)
- 言語風俗 (C3) | 風俗言語 (A1)
- 尽忠報国 (B2) | 報国尽忠 (A1C1)
- 地理歴史 (B1) | 歴史地理 (A1)
- 病院貧院 (A2) | 貧院病院 (C1)
- また、例えば、

- 一家一身 (C1) | 一身一家 (B7C2)
- のように、同一作品中に併用されているもの、
- 軽重大小 (4) | 大小軽重 (4)
- 公智公德 (2) | 公德公智 (2)
- 習慣風俗 (2) | 風俗習慣 (2)
- 尽忠報国 (2) | 報国尽忠 (2)
- のように、それぞれ同数ずつ用いられ、どっち着かずに定着せず揺れているものもある。
- 一身一家 (9) | 一家一身 (1)
- 一心一向 (6) | 一向一心 (2)
- 上下貴賤 (7) | 貴賤上下 (3)

自主自由 (6) √自由自主 (1)

百姓町人 (18) √町人百姓 (2)

停滞不流 (4) √不流停滞 (1)

不羈独立 (9) √独立不羈 (1)

半開野蠻 (6) √野蠻半開 (1)

などは、数の上から見て、定着しつつあるもの、あるいは語調が良く、使い易いものであると思われる。

語によって、かなりののばらつきが見られることから、当時はこのように、揺れのある四字漢語が数多く存在しており、福沢は、それをどちらか一方に決めてしまおうとをせずに、その時の文の流れや、語調の良い方を選ぶなど、双方を併用していたのではないかと思われる。また、この表現には、前後を入れ替えるだけでもだいぶ印象が変わるので、漢字の数を増やさずに、文章に変化を与えることができるという利点も伏在しているのであるうか。

(イ) 一字目三字目の同字反復 (□ a + □ b)

福沢の四字漢語の中には、同字反復表現が数多く見られるが、その中でも一字目と三字目が同字であるものが目立つ。() 内は、%を示す)

下右の表で見ると、この表現は、他氏の作品と比べても、使用度が高いことがわかる。福沢の作品間でみると、B

「学問のすゝめ」に多い。

	一	□
		用 例
無為無智 C 1	一事一物 B 2 C 3	一字一句 B 1
無学無術 C 2	一時一処 C 2	一府一省 B 1
	一父一母 B 1	一利一得 C 1
	一厘一毛 B 2	一科一学 B 1
	一家一身 C 1	一心一向 C 2
	一市一邑 C 1	一種一族 C 1
	一州一郡 C 1	一州一國 C 2
	一身一家 B 7 C 2	一身一己 C 1
	一心一向 B 1 C 5	一進一退 A 1
	一朝一夕 B 1 C 2	一通一絶 A 1
無為無祿 C 1		
無氣無力 B 2		

□ a + □ b 表現には、次のものがある。

	異	延
A	5 (2.3)	6 (1.9)
B	37 (9.6)	66 (11.0)
C	67 (8.1)	95 (6.9)
A C	99 (6.9)	167 (7.3)
D J	23 (4.7)	25 (3.3)
K	4 (4.3)	4 (4.2)

大	自	不	至	無
大山大沢 C 1 大仏大鐘 C 1 大風大雨 C 1	自業自得 B 1 自主自由 B 2 C 4 自由自主 C 1 自主自裁 A 2 自由自在 B 9 C 5	不正不公 C 1 不正不便 B 3 不智不德 B 1 不德不才 C 3 不誠不實 B 2 不善不德 C 1 不盜不詐 C 1 不文不明 B 1	至洪至寬 C 1 至困至難 C 1 至尊至強 C 1 至大至重 B 1 C 3 至文至明 C 2 至公至平 C 1 至善至美 C 2 至大至洪 C 1 至大至難 C 1 至便至利 C 1	無君無政 C 1 無形無體 B 1 無言無情 B 1 無政無法 B 2 C 2 無知無術 C 1 無智無勇 C 1 無形無限 C 1 無芸無能 B 1 無識無學 B 1 無知無學 C 1 無智無德 B 1 C 1 無智無力 B 1

輕	狂	甚	開	幾	所	再	最	公	同	有
輕信輕疑 B 1	狂詩狂文 C 1	甚暑甚寒 C 1	開業開店 B 1	幾百幾千 B 1	所見所聞 C 1	再三再四 B 1	最愚最陋 C 1	公智公德 C 2	同等同權 C 1 同位同等 B 2	有形有限 C 1 有力有智 C 1
美	半	天	多	粗	所得所費 C 1	再上再美 C 1	最後最上 C 1	公德公智 C 2	同塾同窓 B 1	有智有德 C 1
美服美食 B 5	半解半知 B 1	天災天幸 C 1	多芸多能 B 1	粗衣粗食 B 1						

前	世	諸	私	歳	今
前生前身 C 1	世位世官 C 1	諸府諸港 B 1	私徳私智 C 1	歳入歳出 A 1 C 1	今生今身 C 1
輪	暴	片	偏	富	百
輸出輸入 A 1	暴君暴吏 B 1	片重片軽 C 1	偏縮偏重 C 1	富民富商 C 1	百発百中 C 1

□の中に入る漢字には、「一」「百」のような数字や「無」「不」などの否定、打ち消しを表すもの、「大」「軽」「多」など程度を表すものなど、様々であるが、いずれも平易な漢字ばかりである。一番使用度が高いものは、一番画数の少ない「一」で、二十語にも使用されている。これは、「欧米回覧実記」に、「一去一来」の一例が見られるだけで、他の啓蒙家の作品には全く見られない。従って、「一」の多使用は、福沢の特徴の一つと見ることができそうである。

又、この表現の中には、

故に政治の良否を評するには、其国民の達し得たる

文明の度を測量してこれを決定す可し。世に未だ至
 文・明の国あらざれば、
 昔年便利とせし所のものも今日に至りては既に不便
 利なり。又これを倒にして今日の世には至便至利の
 ものたりと雖ども
 (C第七章)
 ただ一命をさへ棄つればよきものと思ふは、不文不
 明の世の常なれども、いま文明の大義をもってこれ
 を論ずれば、これらの人は、未だ命の捨てどころを
 知らざる者と言ふべし。
 (B七編)

のように、「文明」や「便利」という二字漢語の間に、「至」や「不」を挟んで四字漢語を作ったと思われるものも幾つか見られる。

(ウ) 二字目四字目の同字反復 (a□+b□)
 同字反復表現の中には、a□+b□のように、二字目と四字目が同一の漢字であるものも見られるが、□a+□bほど数は多くない。

	異	延
A	6 (2.8)	12 (3.9)
B	7 (1.8)	10 (1.7)
C	14 (1.7)	15 (1.1)
A C	27 (1.9)	37 (1.6)
D J	5 (1.0)	6 (0.8)
K	7 (7.6)	7 (7.4)

Kが比較的多く用いているが、福沢の作品間では、A「西洋事情」に多い。

州	書	司	文	族	心	国		窮	人	院	□
此州彼州 A 1	古書珍書 A 1	国司莊司 C 2	今文古文 C 1	華族士族 C 1	以心伝心 C 1	山国沢国 C 1	自国他国 A 1	貧窮困窮 B 1	此人非人 C 1 婦人下人 B 1	上院下院 A 2 病院貧院 A 2 貧院病院 C 1	用 例
法	家	学	倍	食	税	党	車	参			□
民法刑法 C 1	本家別家 C 1	文学科学 B 4	二倍三倍 B 1	日食月食 C 1	地稅家稅 A 5	正党姦党 C 1	水車風車 B 1	新参故参 C 1			用 例

形	有形無形 C 1	用	有用無用 B 1 C 1
---	----------	---	--------------

これらは、すべて名詞の並列から出来ており、aとbに入るものの中には、「今文古文」「自国他国」「有形無形」などのように、aとbが対義語、もしくは、それに近い意味同士のものが多い。

他氏との重なりは、福沢が「民法刑法」と用いているのに対し、他氏が「刑法民法」と用いているのが目についた他には見あたらなかった。

これらの同字反復表現は、見てすぐに意味がわかり易く、語調も大変良い。又、同じ漢字を反復して用いるため、漢字の数も制限できる。

□ a + □ b と、a □ + b □ の使用度に格差が見られるのは、□ a + □ b では、□ に「一」「無」「不」等を入れることにより、a、b にどのようなものを入れても四字漢語ができるという柔軟性を持っているのに対して、a □ + b □ では、「今文古文」「文学科学」「本家別家」等のように、同じジャンルのものを表した名詞の並列というように限定されてしまうので、□ a + □ b ほど造語力が強くなく、応用が効かずに数が多くならないのだと考えられる。

(エ) 使用度の高い複合語基

福沢の四字漢語には、世界各国・世界第一・世界普通

・世界万国などのように前半の二字漢語が同じものが数多く見られる。

ここでは、複数の四字漢語に共通して用いられている前半の二字漢語を「複合語基」と呼ぶことにする（宮地裕「現代漢語の語基について」ハ「語文」三一号所収による）。

次の表のように、福沢（A～C）の使用量は、他氏（D～J、K）と比べてかなり多い（（ ）内は%を示す）。なお、複合語基の例語は、用例数以上の語を挙げた。

	異	延
A C	345 (24.1)	807 (35.3)
D J	61 (12.5)	214 (28.0)
K	3 (3.3)	3 (3.2)

人間	複合語基	
	1	2
	1	2
	百事 C 1	同権 C 1
	普通 B 1	同等 B 2
	有用 C 1	万事 B 1 C 8
	家内 B 1	生々 B 2
	最大 B 1	世界 B 9 C 11
	男女 B 1	交際 B 14 C 22

西洋	日本	天下	国内	一大
9	1 0	1 0	1 0	1 0
列国 A 1 料理 B 3	全国 B 2 C 2 全体 C 1 文明 C 1	大乱 C 1 一家 C 1 衆人 C 2 太平 C 2	衆人 C 1 治乱 A 2 文明 A 1 有用 C 1	變革 A 2 劇場 C 1 欠点 C 1 災難 B 1 事業 C 1 事件 A 1 難病 C 1
學術 A 1 獨立 C 1 文明 B 2 C 5	人民 B 1 C 1 上国 C 1 政府 C 1	国家 B 2 第一 A 2 文学 B 1	安穩 B 1 一致 A 1 一統 A 1 一般 A 3 産物 A 2 縦横 A 1	惡事 C 1 快事 B 1 緊要 B 1 C 1
各国 A 1 C 3 學者 C 1	国内 B 1 C 3 国民 B 1 C 1	一般 B 1 C 3 後世 B 1 古今 B 2		
諸家 C 1 諸国 A 9 B 14 C 41	國中 B 10 C 17 國人 B 1 C 1			

無智	世界	人民	上下	世間	自由
7	7	7	8	8	8
野蠻 C 1 無勇 C 1 無學 C 1 無術 C 1 無德 B 1 C 1 無力 B 1 文盲 B 1 C 1	無常 C 1 万国 B 2 C 4 万物 C 2 普通 B 1 C 1 各國 C 2 第一 A 1 B 1 人民 C 1	獨立 B 1 C 5 卑屈 C 1 同權 B 1 C 5 柔順 C 1 一個 B 1 一般 B 1 C 8 懷古 C 2	同權 C 1 兩院 A 6 兩局 A 2 貴賤 A 1 B 5 C 1 左右 A 1 一般 C 1 合体 B 1 固有 B 1	朋友 B 1 萬事 C 1 通常 C 2 日常 B 1 人情 C 1 一般 A 1 C 7 人民 C 1 全体 B 1	獨立 B 6 C 2 貿易 B 1 寬大 C 1 寬裕 A 1 自在 B 9 C 5 自主 C 1 正直 B 1 同權 C 1

文明	貴族	獨立	智德	合衆	一國	進退
6	6	6	6	6	6	7
諸國 B 1 如何 C 1 異同 C 1 開化 B 3 C 5 進步 C 4 盛大 B 1	執政 C 1 名家 A 1 武人 A 1 C 1 一人 C 1 執權 C 1 合議 A 1 C 1	市民 C 2 不羈 B 1 文明 C 2 如何 C 3 市邑 C 1 進取 C 1	兼備 C 1 俊英 C 1 四樣 C 2 事業 B 2 進步 C 1 發生 C 1	諸州 A 3 政治 A 8 C 10 獨立 A 1 王國 A 1 國中 A 2 國內 A 2	文明 B 1 C 2 全體 B 2 獨立 B 2 C 4 經濟 B 1 商売 C 1 人民 B 1 C 6	方向 C 2 集散 C 1 增減 C 2 變化 C 1 如何 C 1 圓轉 A 1 榮枯 C 1

野 蠻	輕 重	商 壳	人 生	政 治	全 國	專 制	土 地
6	5	5	5	5	5	5	5
暗黑 C 3 半開 C 1 粗暴 C 1 不文 C 5 草昧 B 1 無法 C 1 草昧 B 1 C 1	緩急 C 1 是非 C 3 善惡 C 1 大小 C 4 長短 C 1	繁昌 A 1 会社 B 1 取引 C 1 全體 B 1 工業 B 1 C 2	活潑 B 1 懶惰 C 1 最上 C 1 天稟 C 1 必備 B 1	學術 C 1 廢壞 C 1 宗門 A 1 風俗 A 2 C 2 商壳 B 1	運動 C 1 人民 B 2 經濟 C 2 C 7 獨立 A 1 工商 C 1	獨裁 C 1 門閥 C 1 抑壓 B 3 C 2 獨斷 C 1 偏重 C 1	山林 A 2 肥沃 C 1 分配 A 1 人民 C 3 肥饒 C 1

立 君	一 種	永 遠	英 國	王 室	活 潑	欺 詐	言 語
5	4	4	4	4	4	4	4
專制 C 2 特裁 C 1 治國 C 1 獨裁 A 3 定律 A 2 C 1	無類 A 1 一族 C 1 無形 B 1 無二 C 1 C 2	無窮 C 1 後生 C 1 洪大 C 1 微妙 C 1	政府 A 2 一統 A 1 所領 A 1 人民 A 1	血統 A 1 零落 C 1 袁廢 C 1 禮儀 C 1	愉快 B 1 為事 B 1 敢為 C 3 氣輕 B 1	反覆 C 1 虛言 B 2 狡猾 C 1 術策 B 2	容貌 B 5 宗旨 C 1 風俗 C 3 文學 C 1

衣服	一身	意見	安樂	風俗	内外	独裁	智力	政府
3	3	3	3	4	4	4	4	4
飲食C3 住居C3 諸具A1	一家B7 C2 一己C1 独立B1	近浅C1 高遠C1 百出C1	逸居C1 国土C1 世界C1	言語A1 習慣B1 C1 取締B2 人情B1	兩樣B1 戰爭C1 多事C1 無事A1	暴政C1 君主C1 政府C1 專一C1	議論C1 工夫A1 獨立C1 發生C3	一新B1 諸藩C1 人造B1 專制C1

蒸氣	宗教	終歲	社中	至大	自主	自国	建国	喧嘩	規則	學術	欧州
3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
膨脹A1 機関A11 B1C6 電信C3	愛敵C1 改革C1 学校C1	胸痛B1 蠢爾C1 馳区C1	集会B1 生徒B1 独立B1	至洪C1 至重B1 C3 至難C1	自裁A2 自由B2 C4 任意A2	一種A1 C1 他国C1 獨立C2	以来A1 C1 政府C1 獨立C2	戰爭C1 爭論C1 囂躁C1	繩墨C1 繁雜C1 約束B1	技藝A2 工作A1 商工C1	一般C1 各国C1 諸国C1

万国	貪欲	地理	著書	智識	大名	政令	精神	数千	人類	神仏	身体
3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
公会 C 1 公法 B 1 C 1 古今 B 1	詐欺 C 2 不正 C 1 文書 C 3	山海 C 1 産物 C 1 歴史 B 1	演説 B 1 詩集 C 1 新聞 C 1	進歩 C 1 道德 B 1 分布 B 1	華族 B 1 士族 C 1 藩士 C 2	商売 C 2 商法 C 1 法律 C 6	独立 B 1 発達 C 3 無形 C 1	年来 C 2 百年 B 7 C 5 万年 C 2	以上 C 2 生々 C 1 生涯 B 1	混合 C 1 兩教 C 1 兩道 C 1	有形 C 1 強壯 A 1 虚弱 C 1

遊冶	民庶	文学	不生	彼我	反覆
3	3	3	3	3	3
暗弱 C 1 放蕩 B 1 C 1 懶惰 C 1	為政 C 1 會議 C 3 合議 C 1	科学 B 4 技芸 A 3 C 8 技術 A 1 C 1	財者 C 1 不公 C 1 不便 B 3	同権 C 1 同等 B 1 C 1 平均 C 1	熟読 C 1 熟考 A 1 請求 A 1

この複合語基は、二字漢語を一つの単位として、その組み合わせを変えることによっていくらかでも四字漢語をつくることができるという強い造語力を持っている。最も多くの二字漢語と結び付いている複合語基は「人間」で、実に十二種類もの二字漢語と結び付いて四字漢語を形成している。これらの複合語基には、福沢にとってキーワードとも言える大切な言葉が見られる。

また、これらの中には、「一大」という複合語基が、

悪事・快事・緊要・劇場・欠点・災難
等の二字漢語に付きそれぞれの意味を強めているものや、

野蠻・暗黒・粗暴・半開・不文

などのように、マイナスの意味を持つ複合語基に、さらにマイナスの意味の二字漢語が結び付いて、マイナスの意味を強めているものが幾つか見られる。これは、福沢が、四字漢語にハ強調の効果Vを求めているものと思われる。

(3) 四字漢語に関連する用法

「学問のすゝめ」と「文明論之概略」の中には、例え

ば、既に一身を脩め又よく一家を教化し

(C第六章)

全国の独立を維持するの一事に在り

(B五編)

のように、四字漢語として用いられているものが、別の場所で一字漢語や二字漢語に分解されて用いられているものが見られる。

このような使われ方は、前者のような対句的なものが、

「学問のすゝめ」では異なりで十一例、延べで十三例、

「文明論之概略」では異なりで二十一例、延べで三十六

例見られる。又、後者の例のように、間に助詞が入るもの

のは、「学問のすゝめ」では異なり八例、延べ十一例、

「文明論之概略」では異なり十例、延べ十九例見られる。

この中には、二字漢語二つに分かれるものだけでなく、例えば、「貧富強弱」が、

凡そ人とさえ名あれば、富めるも貧しきも、強きも

弱きも

(B三編)

のように、四つの一字漢語に分解されているものも八例ある。

このような、分解された形は、多くの場合四字漢語で用いられているが、中には、

百姓は米を作って人を養い、町人は物を売買して世の便利を達す。これ即ち百姓町人の商売なり。

(B二編)

のように、同じ文の中、あるいはその前後の文の中で両方が用いられている例もかなり見られる。これを見ていくと、福沢は、四字漢語を一字、二字漢語に分解して使用したというのではなく、一字、二字漢語を結合させて四字漢語を作っていると考える方が自然であると思われる。

このような、一字及び二字漢語の結合は、漢字の数を増やさずに、四字漢語を沢山作り出すことができるという利点を持っている。

第三節 むすび

「文字之教」の端書において、漢字節限論を唱えた福沢論吉は、彼の代表作である、「西洋事情」「学問のすゝめ」「文明論之概略」の四字漢語において、それを自ら実践している。

漢字を制限するには、四字漢語等を用いないのが手っ

とり早い方法だと考えるのが普通だが、漢語が氾濫し、四字漢語が流行していた明治初期において、福沢は、四字漢語の持つ様々な表現価値（見た目のわかり易さ・口調の良さ・造語力の強さ・含蓄の豊かさ・簡潔さ・強調の働き・インパクトの強さ等）を重視し、それらを生かして、難字を除き、ある程度限定された四字漢語を、回数を重ねて使用していたと思われる。

福沢の四字漢語の中には、前後入れ替え、□a+□b、a□+b□のような同字反復表現等の工夫が見られる他、一字、二字漢語を結合させて四字漢語を作り出しているものも見られる。これらの表現の中には、難しい漢字を用いずに、できる限り漢字の種類を制限するという基本姿勢が、一貫してその根底にあり、読み易く、誰にでも理解できるような、わかり易い文章にするために、

見た目のわかり易さ（同字反復）

口調の良さ（同字反復）

造語力の強さ（複合語基、□a+□b）

強調の効果（複合語基）

インパクトの強さ（四字漢語全般）

等の特長を生かし、四字漢語を愛用していたと言えよう。

【注】（I型）

（○+○）+（○+○）

上院議員・外国映画・時限爆弾・予備選挙

（非I型）

景気回復・有料道路・公式訪問・産炭地域
密輸基地・主演女優・婚約解消・応援演説

①類 （○+○）+（○+○）+○ 文房具店・郵便局長・自家用車

（○+（○+○））+○ 有資格者・不退去罪・都知事選

②類 ○+（（○+○）+○） 新予算案・総建築費・両飛行士

○+（○+（○+○）） 前副首相・超遠距離・権大僧正

③類 （○・○）+（○+○） 中長距離・小中学校・正副議長

（（○・○）+○）+○ 農畜産品・病産院名・各小学校

（○+○）+（○・○） 巡視船艇

④類 （○+○+○+○） 都道府県・市区町村・甲乙丙丁

なお、本稿においては、野村氏に従い、「幾千年万」等の数詞を含む語を除いた。また、「不可思議」「傍若無人」は氏の分類に該当しない。

（さかい）じゅんこ 長野市 昭和小学校教諭